

グリット尺度と社会的望ましき反応尺度の関係 ——Web 調査および質問紙調査による検討——

稲垣 勉*・澤海 崇文**・澄川 采加***・相川 充****

(2020年10月21日 受理)

The Relation Between the Grit Scale and Social Desirability Scale: Investigation Using Web-Based and Questionnaire-Based Surveys

INAGAKI Tsutomu, SAWAUMI Takafumi, SUMIGAWA Ayaka, AIKAWA Atsushi

要約

「やり抜く力」とも呼ばれるグリット (grit: Duckworth, Peterson, Matthews, & Kelly, 2007) は、大学生における GPA の高さや、営業職における持続と関連がある。グリット尺度は2つの下位尺度から成り、邦訳版も作成されている。ただし、このグリット尺度への回答は社会的望ましきによって歪む可能性がある。本研究ではこの点を検討するため、社会的望ましき反応尺度とグリット尺度の相関関係を検討した。また、近年は Web を用いた調査も広く行われているため、本研究では Web 調査および従来型の質問紙調査の両者を実施し、結果に相違が見られるか否かも検討した。分析の結果、Web 調査、従来型の質問紙調査の両者において、グリット尺度は社会的望ましき反応尺度の下位尺度である自己欺瞞、印象操作の両者と正の相関が有意であった。一連の結果から、Web 調査、質問紙調査の両方において、グリット尺度への回答は社会的望ましきの影響を受ける可能性が示された。

Keyword : grit, consistency of interests, perseverance of effort, social desirability

* 鹿児島大学 法文教育学域 教育学系 講師

** 流通経済大学 社会学部 准教授

*** 鹿児島大学大学院 教育学研究科 大学院生

**** 筑波大学 人間系 教授

問題と目的

近年、注目を集めている「非認知能力」の一つに、グリット (grit: Duckworth, Peterson, Matthews, & Kelly, 2007) が挙げられる。グリットは「やり抜く力」などとも呼ばれ (Duckworth, 2016 神崎 (訳) 2016), グリットの高さは大学生における GPA の高さ (Duckworth et al., 2007) や、営業職における持続と関連がある (Eskreis-Winkler, Duckworth, Shulman, & Beal, 2014)。Duckworth et al. (2007) が作成したグリット尺度は、「consistency of interests」と「perseverance of effort」という2つの下位尺度から構成されている。

グリットは国内でも検討が進められており、グリットが高いと、高校における数学の試験の得点が高い (清水, 2018), 教員養成系の大学生において教員採用試験を受験し、そして合格しやすい (竹橋・樋口・尾崎・渡辺・豊沢, 2019), 対人援助職においてバーンアウトしにくい (井川・中西, 2019) などのポジティブな結果が報告されている。

グリット尺度の翻訳版を作成した竹橋他 (2019) は、2つの下位尺度を「興味の一貫性」と「努力の粘り強さ」と命名している。その項目例は、前者は「目標を決めても、後から変えてしまうことがよくある (逆転項目)」, 後者は「困難があっても、私はやる気を失わない」などがある。グリットの高さが将来の成功を予測しうることを踏まえれば、将来的には、この尺度が入試や企業の採用試験等で取り入れられる可能性もあると思われる。

ただし、これらの項目への回答には、いわゆる「望ましい」回答が可能である。仮に就職試験や適性検査において上記の項目のようなことを問われれば、興味の一貫性、努力の粘り強さともに「高く」回答するよう動機づけられる可能性がある。こうした点は稲垣・澤海・澄川・相川 (2020a) においても指摘されているが、本研究ではこの点について直接的に検討するため、自己欺瞞と印象操作からなる社会的望ましき反応尺度 (谷, 2008) とグリット尺度の相関関係を検討することとした。

また、近年は Web を用いた調査も広く行われていることから、本研究では Web 調査および従来型の質問紙調査の両者を行い、調査の実施形式により結果に相違が見られるか否かも検討した。

方 法

調査対象者 Web 調査は、調査会社に依頼し、18-29 歳の男女 200 名 (男女とも 100 名ずつ、平均年齢 20.62 歳, $SD = 1.94$ 歳) を対象とした。質問紙調査は、九州地方の国立大学に通う 18-24 歳の大学生 152 名 (男女とも 76 名ずつ、平均年齢 20.70 歳, $SD = 1.09$ 歳) を対象とした。

材料 本研究では、以下の尺度を用いた。

(a) 日本語版グリット尺度 (以下、グリット尺度) Duckworth et al. (2007) が作成した尺度を翻訳した竹橋他 (2019) の尺度を用いた。先述のとおり、「興味の一貫性」と「努力の粘り強さ」から成り、各 6 項目、計 12 項目の尺度である。回答は「1: 全く当てはまらない—5: 非常に当てはま

る」の5件法を用いて求めた。

(b) 社会的望ましき反応尺度日本語版 Paulhus (1991) が作成した尺度を翻訳した谷 (2008) の尺度を用いた。「自己欺瞞」と「印象操作」から成り、各12項目、計24項目の尺度である。自己欺瞞は回答者が本来の自己像と信じて無意識的に回答を歪曲するものであり、印象操作は故意に回答を良い方向あるいは悪い方向へと歪曲し、真の自己像を偽って報告するものであるとされる (谷, 2008)。回答は「1: 全くあてはまらない—5: 非常にあてはまる」の5件法を用いて求めた。

手続き 調査対象者に対し、グリット尺度および社会的望ましき反応尺度への回答を求めた。Web調査、質問紙調査のいずれにおいても、協力は任意であること、回答しないことへの不利益は生じないことを教示した上で、調査への協力について同意する者に対してのみ回答を求めた。これらの他にもいくつかの心理尺度への回答を求めているが、本研究の目的とは関連がないため、報告は割愛する。

結 果

各尺度の得点化 グリット尺度および社会的望ましき反応尺度について、それぞれ逆転項目を処理した上で合算平均値を求め、各尺度の得点とした。得点が高いほど、当該の尺度名の傾向が強いことを示す。各尺度の内の一貫性の指標として α 係数を求めたところ、興味の一貫性、努力の粘り強さ、自己欺瞞、印象操作の順に $\alpha = .86, .77, .71, .70$ という値が得られたため、各尺度は一定の内の一貫性を有すると判断した。

調査の実施形式による尺度得点の相違の有無 本研究では Web 調査および質問紙調査の両者を実施した。調査の実施形式による各尺度の得点について差が見られるか否かを対応のない t 検定によって検討したところ、調査の実施形式による差は認められなかった ($ts < 1.88, ps > .06$)。

各尺度間の相関関係 各尺度間の相関係数を求めたところ、Web 調査・質問紙調査の両者において、グリットの総得点および2つの下位尺度はいずれも社会的望ましき反応尺度の2つの下位尺度と有意な正の相関を示した。相関分析の結果と、各尺度の記述統計量をまとめて Table1 に示す。

Table1 各尺度の相関係数および記述統計量 (右上: Web調査, 左下: 質問紙調査)

	1	2	3	4	5	M	SD
1 グリット総得点	—	.79 **	.60 **	.38 **	.34 **	2.98	0.55
2 興味の一貫性	.75 **	—	.01	.23 **	.32 **	3.07	0.75
3 努力の粘り強さ	.82 **	.24 **	—	.39 **	.18 *	2.80	0.81
4 自己欺瞞	.29 **	.24 **	.23 **	—	.38 **	2.73	0.51
5 印象操作	.40 **	.35 **	.30 **	.18 *	—	2.96	0.56
	M	2.93	2.94	2.92	2.77	2.91	
	SD	0.52	0.60	0.70	0.52	0.56	

** $p < .01$, * $p < .05$

考 察

本研究は、グリット尺度の得点が社会的望ましきによって影響を受ける可能性を検討するため、グリット尺度と社会的望ましき反応尺度の相関関係を検討した。その際、Web 調査と質問紙調査の両者を実施し、調査の実施形式により、各尺度の得点や各尺度間の相関関係に差が見られるか否かについても検討を行った。得られた結果について、以下に考察する。

調査の実施形式による尺度得点の相違の有無 分析の結果、Web 調査と質問紙調査との間では、いずれの尺度においても有意な差は見出されなかった。したがって、グリット尺度や社会的望ましき反応尺度の得点は、Web 調査および質問紙調査という調査の実施形式によっては差が見られないことが示された。

グリット尺度と社会的望ましき反応尺度の関係 当初の予想に一致して、グリット尺度は社会的望ましきによって回答が影響を受ける可能性が示された。また、この傾向は Web 調査、質問紙調査という調査の実施形式の違いにかかわらず見られることが明らかになった。この結果は、グリット尺度の得点は無意識的（自己欺瞞）、意識的（印象操作）を問わず、ポジティブな方向に歪められる可能性があることを示している。したがって、当該の尺度を適性検査やスクリーニングなどに用いる場合には、得点の解釈は慎重に行うべきであると言えるだろう。

今後の展望 こうした社会的望ましきの影響を受けにくい測度として、近年は潜在連合テスト (Implicit Association Test; Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998) などの潜在的測定法を用いた心的傾性の測定が提案されている。グリットの研究においても例外ではなく、稲垣・澤海・澄川・相川(2020b)によって、グリットを潜在的に測定する試みも始められている。ただし、潜在連合テストなどの潜在的測定法は、質問紙などの顕在的測定法に取って代わるものではなく、心的傾性を多面的に測定するための道具の一つである (相川・藤井, 2011; 藤井, 2013)。したがって、今後はこうした潜在的測度も併用するなどして、グリットを多面的に測定する試みを進めていく必要があると思われる。

引用文献

相川 充・藤井 勉 (2011). 潜在連合テスト(IAT) を用いた潜在的シャイネス測定の試み 心理学研究, 82, 41-48.

Duckworth, A. L. (2016). *GRIT: The power of passion and perseverance*. New York: Scribner.

(アンジェラ・ダックワース. 神崎 朗子 (訳) (2016). やり抜く力——人生のあらゆる成功を決める「究極の能力」を身につける ダイヤモンド社)

Duckworth, A. L., Peterson, C., Matthews, M. D., & Kelly, D. R. (2007). Grit: Perseverance and passion for long-term goals. *Journal of Personality and Social Psychology*, 92, 1087–1101.

- Eskreis-Winkler, L., Duckworth, A. L., Shulman, E., & Beal, S. (2014). The grit effect: Predicting retention in the military, the workplace, school and marriage. *Frontiers in Psychology*, 5 (36).
- 藤井 勉 (2013). 対人不安 IAT の作成および妥当性・信頼性の検討 *パーソナリティ研究*, 22, 23–36.
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The Implicit Association Test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1464–1480.
- 井川 純一・中西 大輔 (2019). 対人援助職のグリット (Grit) とバーンアウト傾向及び社会的地位の関係——高グリット者はバーンアウトしにくいのか?—— *パーソナリティ研究*, 27, 210–220.
- 稲垣 勉・澤海 崇文・澄川 采加・相川 充 (2020a). 日本語版グリット尺度の再検査信頼性——2ヶ月間隔の調査から—— *日本心理学会第84回大会発表論文集*, PB-007.
- 稲垣 勉・澤海 崇文・澄川 采加・相川 充 (2020b). Grit を測定する Single Target-Implicit Association Test の作成の試み *教育テスト研究センター年報*, 5, 53-55.
- Paulhus, D. L. (1991). Measurement and control of response bias. In J. P. Robinson, P. R. Shaver, & L. S. Wrightsman (Eds.), *Measures of personality and social psychological attitudes* (pp.17–59). New York: Academic Press.
- 清水 優菜 (2018). Grit と達成目標, 数学の成績の関係 *日本教育工学会論文誌*, 42, 137–140.
- 竹橋 洋毅・樋口 収・尾崎 由佳・渡辺 匠・豊沢 純子 (2019). 日本語版グリット尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 *心理学研究*, 89, 580–590.
- 谷 伊織 (2008). バランス型社会的望ましき反応尺度日本語版 (BIDR-J) の作成と信頼性・妥当性の検討 *パーソナリティ研究*, 17, 18–28.

付記

本研究は、第一著者・第二著者・第三著者が NPO 法人「教育テスト研究センター (CRET)」の連携研究員として、第四著者が理事として行ったものである。調査にご協力いただきましたみなさまに、心からお礼申し上げます。